様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７３０４９２

研究課題名（和文）在日台湾系華人とメディア：文化、言語、アイデンティティの形成と変容をめぐる考察

研究課題名（英文）Taiwanese Diaspora and Media in Japan: The Formation and Transformation of Their Culture, Language and Identity

研究代表者
リン　イーシェン（LIN, I-HSUAN）

立教大学・社会学部・准教授

研究者番号：８０５３３０２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は台湾系華人を対象に、彼らのコミュニティ・ネットワークにおけるメディアの位置づけを検討し、その機能的変化を探ることが目的である。
　まず、華僑のメディアをエスニック・メディアとして捉え、その定義を文献調査と理論概念の検討から考察した。また、フィールドワーク調査では日本各地と台湾を訪ね、関係者にインタビューした。様々な歴史的・社会的文脈の考察から、台湾系華人の独自なアイデンティティの形成およびメディア（放送、新聞、出版物）の役割を明らかにし、また、出身地、言語、家族、職場、教育程度などの要素の考察を通して、台湾系華人が19世紀後半から持ち続けているアイデンティティの変容を一部把握できた。

研究成果の概要（英文）：This research focused on Taiwanese diaspora in Japan and their media uses within the community network. Two research steps are adopted. Firstly, to clarify the definition and concepts of ethnic media used by KAKYO and KAJIN (both refers to Chinese diaspora in Japanese), a theoretical research and analysis were conducted by reviewing English, Chinese, and Japanese literatures. Secondly, fieldworks and interviews were conducted in Yokohama, Kobe, Nagasaki in Japan and Taiwan by visiting Chinese Diaspora areas. Through fieldwork and historical/societal context research, the formation of Taiwanese diaspora's identity and its transformation is partly revealed. Besides, the process of Taiwanese diaspora's media usage and its relationship with identity formation/transformation is also partly demonstrated.

研究分野：メディア・ジャーナリズム研究

キーワード：華僑　華人　エスニシティ　メディア　ディアスポラ

１．研究開始当初の背景

（１）日本社会における華僑という存在

日本における中国人移民の存在は、16 世紀の長崎開港とそれに伴う「唐人」の進出の歴史まで遡れる。17 世紀から中国沿岸部を中心にした人々が海外の新天地へと渡航した。彼らは勢力をなす「華商」となるケースもあれば、18-19 世紀の労働移民「華工」として居住国で根付いた例もある。20 世紀に入ると、愛国民主主義の思想を持ち、様々な分野で活躍した「華僑」が現れ始める（斯波、1995:8）。そして 60 年代以降に「華裔」と呼ばれる新たなタイプが登場し、彼らは「高学歴化、都市中産階層化」、「コスモポリタン化」と特徴づけられている（劉傑、譚璐美、2008）。近年、居住国に帰化した華僑を指す概念として「華人」が登場し、「華僑・華人」のように並列的に使われるようになった。祖国への帰属意識や国籍維持の意識が薄れて行く一方、他方では居住国での就職や生活上の便宜のために帰化した例が増加している。これまで数多くの研究はこうした華人社会の構造的変化を歴史的、社会的文脈から捉えたものである（游仲勳、1990;日本華僑華人研究会、2004；陳天璽、2001;安井三吉、2005）。また、ミクロの個人的経験から「華僑・華人」の間に現れた錯綜したアイデンティティと国籍の問題を捉えた研究もある（陳天璽、2011）。こうした研究は華僑二世や三世が直面しているアイデンティティの選択問題を克明に描きだし、一定の社会的可視化に繋がったと言える。

（２）華僑エスニシティ内部の多様性

台湾系と中国系華僑の間には、戦後から今日まで様々な軋轢や対立が起こっていた。経済的利害関係をはじめ原因は様々だが、現在も続く中国と台湾の政治関係をめぐる衝突が最もたるものである。その代表的な例は横浜中華街における両者の分裂である。また、1972 年日中国交正常化に伴う台湾系華僑の国籍選択の問題、そして台湾出身社の外国人登録証明書における国籍欄の「中国」の記載など、多くの問題がある。そのため台湾系華人の存在が次第に薄れつつある。そうしたリアルポリティクスに呼応するかのように、台湾系華人の存在は日本の主流メディアが作り出した「メディア現実」からもその姿を消すこととなる。

台湾系華人は大まかに客家と閩南に細分できる。彼らはそれぞれ固有の言語・方言を使い、異なる伝統風習を守っている。華僑総会や崇正公会などの組織によって日本と母国とのつながりをもち、長年台湾への思い入れを胸に秘めている彼らは、近年「ディアスポラ」という概念によって捉えられている。

２．研究の目的

本研究は、台湾系華人ネットワークにおけるメディアの位置づけおよびその社会的機能を考察することが目的である。そのため、主流メディアの表象を考察するほかに、エスニック集団のメディア実践にも注目した。また、「台湾系華人ネットワーク」という視点から、台湾系華僑はどのようなエスニック・メディアを通してみずから歴史やアイデンティティを語り、そしてそのエスニック・メディアの役割と可能性はいかなるものなのかについても考察するものである。

３．研究の方法

本研究は理論分析と事例研究の手法によって行う。

（１）〔理論・概念分析〕

関連理論の重要な文献を中心に概念を考察する。「エスニック・メディア」を「エスニシティ」と「メディア」の二つの概念に分離させ、「エスニシティ」の立場からみたマスメディア研究との接点、それから「メディア」の立場からみた「エスニシティ」研究との接点といった二つの方向から考察した。また、ポストコロニアリズム、グローバリゼーションの視点からメディアの機能を批判的に捉えながら、関連概念のトランスナショナリズム、デァイスポラ、オルタナティブ・メディア等の検討を通して、事例研究で得た成果の理論的枠組みの形成を試みた。

（２）〔事例研究〕

本研究の事例研究の部分は、台湾系華人社会と華人エスニック・メディアを主な対象とする。前者については、歴史文献調査とフィールドワークを行う。日本における台湾系華僑の歴史と分布状況を把握するために、長崎、神戸、横浜、池袋における華僑社会を調査対象とし、それぞれの特徴とアイデンティティの形成や変化についてフィールドワークを通して考察した。次に当該エスニック・メディアについて、異なるメディア媒体（新聞、放送、雑誌、出版物など）の特性と利用形態や機能に分けて考察・分析した。

４．研究成果

本研究の理論と事例研究両方から得られた成果を以下のように述べる。

（１）〔理論・概念分析〕

エスニック・メディアの理論概念を考察し、ディアスポラ、アイデンティティ、言語などの関連概念をもとにエスニック・メディアのもつコミュニケーション機能のほか、とりわけマイノリティ集団の内部における結束機能、そして外部との情報・意見交換機能に注目し分析した。また、主流社会との政治的駆け引きやエスニック集団間の政治的コミュニケーションにおけるエスニック・メディアの両義性問題についても指摘し、その可能性と限界を明らかにした。

（２）〔事例研究〕

事例研究において、メディア表象の内容分析およびエスニック・メディアの形成活動の二つの側面から調査し、考察した。

これまでのエスニシティをめぐる社会文

化的研究が呈した華人社会の多様な側面とは裏腹に、マスメディアによって取り上げられた華人社会のイメージは、いとも単調で画一なものであった。代表者が行ったNHKと民放のドキュメンタリー映像の内容分析の結果によれば、中国大陸系が多数を占めるなかで、北京ダックや上海ガニ、広東料理に代表された中華料理、孔子の教えに基づいた儒教の道徳観、そして獅子舞や旧正月などに代表される伝統行事（芸能）がほとんどの映像内容を構成していたことが分かった。日本の主流メディアが繰り返し取り上げたこれらの生活的、文化的特徴が華人社会を表象するシンボルとなり、ステレオタイプとして固定化されている。しかし、華人のなかには、大きく分ければ中国、台湾、香港といった異なる社会文脈を出自とする人々が存在している。とりわけ台湾出身の人々にとって、日本植民地の経験は彼らをほかの華人から一線を画す特別な存在と認識させるものであった。2009年4月に放送され、賛否両論反響を呼び政治問題にまで発展した『NHK スペシャル アジアの一等国』は、植民地によって翻弄された台湾人の人々の運命を描出したものである。だが、戦後、日本の国民国家の境界線の内部で、身分と国籍の苦渋極まる選択を余儀なくさせられた彼ら台湾人の存在は、これまでのメディア言説のなかでほとんどふれられていない。多文化社会日本を作り上げていく上で社会全体が共有すべき記憶と理解しあうべき経験であるはずだが、実際のところ主流メディアの言説のなかに無視され、社会的に忘却されている。しかし、2005年からの日台間査証相互免除とそれによる頻繁な人的、文化的交流が行われ、2014 年には約282万人の台湾人観光客が訪日し、2009年の入管法における「台湾」記載修正の法改正の動きは、日台関係に新たな展開をもたらした。こうした歴史的進展の傍ら、華僑・華人として日本に長年居住してきた台湾系の人々は、どのような歴史を背負い、自己のアイデンティティと文化や言語をどのように維持して来たのか。彼らの存在と日本主流社会とのつながりをメディアの視点からより詳しく調査することが必要と考えられる。

結論から言えば台湾と日本の主流メディアはともに「異国的」、「お祭り」、「疎外」、「忘却」のフレーミングから台湾系華人の存在を捉えてきた。台湾のメディア言説では、在日の台湾系華人は日本植民地と戦後日本との国交断絶を象徴するシンボル的存在であり、古き良き伝統や文化を海外で保持し続けて来た同胞であるとは言え、彼ら／彼女らを「他者」、「異国人」として扱う眼差しがあることも否定できない。また、日本の主流メディア言説においては、開港の歴史とともに語られている華僑・華人の言説のなかには、伝統的祭事、文化、言語、地縁／血縁による繋がり、さらに中華料理、華僑コミュニティとしての中華街／チャイナタウンという地理的居住傾向を強調する言説は、繰り返し再生産されている。そこで表れたのは、「無害な異国人」というイメージであり、日本社会とは一線を画すような存在であるように描かれている。近年の台湾観光ブームに伴い増加しつつある台湾紹介の番組コーナーを見ても、在日台湾華僑・華人の存在は「忘却」のフレーミングによって除外され、現代の台湾や日台交流を語るのに必要な要素でなくなる認識を作り上げた。唯一、戦後の在日台湾系華人に焦点を当て、長年の取材を通して作り上げられたドキュメンタリー映画は、『台湾アイデンティティ』（酒井充子監督）である。2013 年に上映されたこの作品のなかに、戦前から戦後にわたり「日本人」、「中国人」、「台湾人」という三つのアイデンティティを余儀なくされる台湾系華人が抱えている苦悩と葛藤が克明に描かれている。このように主流メディアにおける「疎外」、「忘却」のフレーミングが存在している一方、個人制作のドキュメンタリー作品によって台湾系華人の存在という社会的記憶の断片が補給され、維持されている。

当事者のエスニック・メディア形成活動の考察について、多くの中国系移民向けの中国語新聞や衛星放送があるなかで、唯一台湾人向けの『台湾新聞』、そして台湾人留学生のSNS（Social Networking Service）などの台湾系華人向けのメディアを考察対象とした。『台湾新聞』の日本語版と中国語版の記事内容分析を通して、前者は日本社会と台湾系華人との交流活動や事業展開、個人活動などが主な内容に対して、後者は台湾国内、そして華僑・華人コミュニティ内の出来事を中心に報道する傾向を示している。すなわち日本語版は日本人読者と長期居住の在日台湾系華人、中国語版は短期滞在者や中国語ネイティブの在日一世を意識しての内容編成であることが確認できた。台湾人留学生のSNSで展開されている言論や意見交流のなかに、「台湾からきた留学生」というアイデンティティの形成や維持のほか、留学生活のなかで遭遇する衣食住の問題をはじめ、勉学や人生相談、賃貸売買など様々な意見交換が行われている。こうしたウェブ上で展開されている言論の社会的空間の積極的利用と共有は、新世代の台湾人短期・長期移住者のメディア利用におけるもっとも大きな特徴であり、今後集団内コミュニケーションネットワークとしての発展がさらに期待されている。他方では、80 年代以前の台湾系華人ネットワークには、伝統的メディアとしてのテレビや新聞などの活字媒体、そして各同郷団体発行の出版物や通知は主なメディアとして機能していることがわかる。

また、台湾系華人に特化していないものの、華僑エスニック集団の当事者による集団記憶の保存と再構成をめぐる活動は、華僑のネットワーク内部における注目すべき動きであると考えられる。華僑博物館の設立（張

2005)、口述歴史の記録集、華僑・華人歴史の記録の編纂、そして通信ニュースレターといった活字メディアの存在を通して現在のみならず、戦前・戦後日本社会に根付いて来た華僑・華人エスニック集団による自己アイデンティティを模索する軌跡そのものも、こうして自主的な活字メディアの活動のなかから確認することができた。

本研究は以上のように理論と実証研究双方から台湾系華人とメディアとの関係を考察した。しかし、世代ごとのメディア使用の特徴や変化、それがアイデンティティの産出や維持においてどのような傾向を示しているのかは、まだ十分に考察し、検討していない。これを今後の課題としたい。

＜引用文献＞

張玉玲（2005)「日本華僑による文化提 示とエスニック・アイデンティティの主張――神戸華僑歴史博物館の考察を中心に」『国際開発研究フォーラム』29:153-170.
斯波（1995)『華僑』岩波新書.
劉傑・譚恩美（2008)『新華僑　老華僑―変容する日本の中国人社会』文春新書.
陳天璽（2001)『華人ディアスポラ――華商のネットワークとアイデンティティ』明石書店。
陳天璽（2011)『無国籍』新潮文庫.
游仲勳（1990)『華僑―ネットワークする経済民族』講談社.
日本華僑華人研究会（2004)『神戸と華僑――この150年の歩み』のじいぎく文庫.
安井三吉（2005)『帝国日本と華僑――日本・台湾・朝鮮』青木書店.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計４件）

① LIN, I-Hsuan 、「Media Discourse and Representation of Chinese Diaspora in Japan」、「Ethnicity, Race and Nationalism in European Media and Film: Rights, Responsibilities, Representations」国際シンポジウム、2013年5月25日、マンチェスター大学「マンチェスタ（イギリス)」、査読あり、単独英語発表。

②林怡蘆、「近年台湾のマスメディアにおける構造変化」仙台大学学術サロン研究発表会、2012年10月28日、仙台大学管理研究棟２階大会議室（宮城県仙台市)、単独発表。

③林怡蘆、「台湾メディアの歴史と現在」、「メディア研究のつどい」研究会、2012年2月22日、東京大学大学院情報学環・福武ホール地下二階、福武ラーニングスタジオ１・２（東京都文京区)、単独発表。

④林怡蘆、「『華僑の樹』――台湾と中国の歴史からみた‘華僑’を考察する」、放送番組の森研究会・第二回公開研究発表会、2011年11月19日、(財）放送番組センター・放送ライブラリー７階大会議室（神奈川県横浜市)、単独発表。

〔図書〕（計２件）

①林怡蘆、立教大学出版会、『台湾のエスニシティとメディア――統合の受容と拒絶のポリティクス』2014年、326頁。

②林怡蘆、日外アソシエーツ、『放送番組で読み解く社会的記憶――ジャーナリズム・リテラシー教育への活用』「華僑・華人の樹」、2012年、379(57-91頁)。

６．研究組織
(1)研究代表者
リン　イーシェン（LIN, I-Hsuan）
立教大学・社会学部・准教授
研究者番号：８０５３３０２５